



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ神秘主義における「語り」：社会システム理論からみたエックハルトと禅仏教
Author(s)	鈴木, 純一; Suzuki, Junichi
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 78, 103-123
Issue Date	2025-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94453
Type	departmental bulletin paper
File Information	78_05_Suzuki.pdf



ドイツ神秘主義における「語り」 —社会システム理論からみたエックハルトと禅仏教—

鈴木 純 一

“Narrative” in German Mysticism

—Eckhart and Zen Buddhism from a social theoretical perspective—

SUZUKI Junichi

1. 『語ることと黙すること』

1989年、ニクラス・ルーマンは弟子のペーター・フックスとの共著『語ることと黙すること (Reden und Schweigen)』を刊行する。1984年に『社会システム』を発表し、それまで積み上げてきた社会理論研究をひとまず体系化したルーマンは、その理論の適応可能性を様々な領域で検討していた。ルーマン理論に批判的な各領域の専門家たちとの生産的な議論も組み込みながら、教育、経済、宗教、法等の学問分野はもちろん、自己言及、間主観性、意味、自伝、エコロジー等の概念や理論的構造を、具体的・歴史的事例を取り込みつつ、より精緻に形式化する作業を集中的におこなう。これによって、いわゆる「複雑性の縮減からオートポイエーシス・システム論へ」という基本的なフレームの推移を確たるものにしていく。この後、現代社会の主要な機能システムを体系的に記述する一連の『社会の〜』シリーズを世に問うていくが、その最初の巻である『社会の経済』が刊行されたのは1988年のことである。「情報・伝達・理解」三極の選択構造として規定され、「意味 (Sinn)」を介して自律的に接続し続ける「コミュニケーション」概念を基礎に、「社会」現象を一貫した観点から記述しつくそうというラディカルな試みである。この志向性は、一方では頑な拒否反応を伴いながらも、諸領域で新たな説明可能性として徐々に認知され、着実な成果を挙げていく。『語ることと黙すること (Reden und Schweigen)』は、そのような時期に書かれたが、やや特殊な性格を有する著作となっている。

この書が主たる対象としているのは、ドイツ神秘主義、修道僧の遁世と沈黙、禅仏教の問答 (公案) における言語 (戦略) 等、現代の機能分化社会からは少し離れた場所に位置するコミュニケーション形態である^(注1)。もちろんこの書においても、基本的にルーマンのシステム理論の視点からのアプローチが行われ、コミュニケーションの起動、接続と意味、自己再生産の

プロセスが問と分析の中心となっている。換言すれば、対象領域において、どのように「社会」なるものが現象するのか、可視的になるのか、機能するのか、というのが基本的な視点となっている。

しかし、この著作はルーマン研究において、少なくとも現在まで、多くの関心を集めることはなく、管見の限り、踏み込んだ研究がなされた形跡は見当たらず、邦訳もない。このことは、同時期の他の著作と比べ、本書が極めて特殊な志向性をもっていることと関係があるだろう。この特殊な志向性は対象そのものの持つ志向性と重なる。すなわち「ドイツ神秘主義」あるいは「禅仏教」が志向するのは、一言でいえば「コミュニケーション」そのものへの抵抗でもある。本来、ルーマンの社会理論における「コミュニケーション」とは、「社会」を現象させる最も基本的な要素である。「コミュニケーション」が成立するところに「社会」は現象する。「コミュニケーション」が成立しないところには「社会」は現れない。ドイツ神秘主義や禅仏教に一般的に見られる世俗的な交わりの回避、戒律をとまなう沈黙の重視といった特徴は、「コミュニケーションへの抵抗・拒否」の身振り、さらに言えば、「社会」からの逃避あるいは離脱の試みと捉えることができる。このような志向性は、さしあたり、ルーマンのいう近現代社会のメルクマール、機能分化するコミュニケーション社会とも著しく逆行する。「コミュニケーションへの抵抗・拒否」は、社会機能へアクセスすることへの抵抗・拒否をも意味するからである。さらに言えば、現代社会の成立条件を根底から切り崩しかねない危険性をも孕んでいる。他方、「コミュニケーションへの抵抗・拒否」を、ルーマンのシステム理論そのものの視点から分析する意味も大きい。それは、ルーマンの社会理論の到達範囲と限界、あるいはひょっとするとその「外」にある「社会」を当の理論が可視化しうるのか、といった自己言及的な問題を見極める試みにもなるからである。

とはいえ、ドイツ神秘主義にせよ、禅仏教にせよ、コミュニケーションへの抵抗の身振りは見せるが、コミュニケーションそのものが完全に消去されているわけではない。まず、世俗との交わりの回避や、可能な限り沈黙することの戒律、これらのコミュニケーションから距離を置くことそれ自体が、テーマとして語られ、コミュニケーションされているという事実がある。加えて、禅仏教における公案（問答）や神秘主義者の説教のように、その内容（オブジェクトレベル）としては「何かについて語ること」自体の無効性を語りつつ、その形式（メタレベル＝二次観察レベル）においては「自らの語り（＝何かについて語ること）」の意味を指し示しようとする試み、さらには、そのような「語り自体の語り」を自己産出し継続しようとする事例も見られるのだ。

おそらく問題の核心の一つは、コミュニケーション回避のコミュニケーション、沈黙を志向する語り、あるいは語りを消去しようとする語り、このような自己言及が呼び起こす論理的な不整合に、すなわちパラドクスないしトートロジーに根差している。真偽の確定を拒む自己否定自己言及パラドクスやメタとオブジェクトを循環する自己言及トートロジーの問題は、ルー

マン理論における「システム」の起源、つまり差異化オペレーションの根底にあるものとして極めて重要な位置づけがなされている^(注2)。ルーマン自身は、これらの問題の現代社会における「処理」の観点から、換言すればコミュニケーション継続に際しての「無害化」の観点から、つまりシステムにおけるパラドクスおよびトートロジーを「不可視化」し、機能的なコミュニケーションがいかにして継続するかという方法論の観点から分析するのが常である。

しかし、この研究ではスタンスが異なっている。ドイツ神秘主義や禅仏教に現れる自己言及するコミュニケーション、それに由来するパラドクスおよびトートロジーの問題は、「コミュニケーションに抵抗するコミュニケーション」構造として正面から展開される。歴史上最も手強い抵抗に属するものとして扱われ、その深層へと入っていくことが試みられる。すなわち、機能的な処理プロセス、無害化のメカニズムを記述するのではなく、そのような論理的不整合が持っている可能性を徹底化した際に現れるかもしれぬ（現れたかもしれぬ）新たな状況の描写を、いわばある方向性の徹底化がもたらす逆方向への反転可能性の描写を試みているのである。事実、そのような「突破」の志向性を、すなわちルーマン理論の記述する「社会」システムの「外」の志向性を、ドイツ神秘主義あるいは禅仏教から著者たちは読み取ろうとする^(注3)。共著者のフックスの神秘主義への興味やパラドクス（もしくはトートロジー）による論理的限界への偏愛もあったであろう。それが、ルーマンのいう近代社会システムの強固な「自己記述」メカニズムと危ういバランスを取り、奇妙にかみ合っているようにも思われる。すなわち、機能分化社会のコミュニケーションに関する強い（＝普遍性を志向する）理論的かつ意味論的説明（ゼマンティーク）が、コミュニケーションを回避ないし無効化する例外的な志向性の意義を明確に浮かび上がらせているように思われる。

システム理論の「外」をシステム理論の観点の下でどのように記述することができるのか、あるいはパラドクスないしトートロジーを抱えながら（抱えるがゆえに）、あるやも知れぬ「その先」を可視的に、可感的にするものは何なのか。本論の関心の中心はそこにある。したがって、本論は、ドイツ神秘主義そのもの、禅仏教そのものを明らかにするものではないが、そこで行われていたコミュニケーション（の回避）が、どのような形をとっているのか、そしてシステム理論にとってどのような意味を持つのか、あるいはその意味の場を超えて、「外」の新たな意味を獲得しているのかについて、ルーマンとフックスの理論的なアプローチと対話しつつ、考察を試みるものである。

本論文では第2節でまずエックハルトを中心とするドイツ神秘主義の語り（と沈黙）の特性を探る。そこで現れる「神」（「一者」）を言葉の自律的生成力とつなげるのが第3節である。続く第4節では、それを被造物のことば（＝システムの論理）から見た場合に、ルーマンのいう「リエントリー（＝再参入、内部転写）」として解釈されうることを論じる。さらに第5節では、このリエントリーから生じるパラドクスとトートロジーの輪郭を明らかにする。第6節

は、第5節で現れる論理的不整合の構造が、否定神学をはじめとする伝統的な神の語り方を規定してきたことを確認する。と同時に、再び被造物のことば（リエントリー構造）で捉え直す可能性を探るのが第7節である。ここでは禅仏教の公案（禅問答）を素材にした思考実験もおこなう。最後に現代コミュニケーション・システム社会における『語ること黙すること』という視点の意義についてささやかな考察おこなう。

2. ドイツ神秘主義

ドイツ神秘主義とは、一般に、13～14世紀に主としてライン川流域で異端的な神秘体験をもとに宗教活動を行った一派の思潮を指す。中心人物には、いずれもドミニコ会士であるタウラー、ゾイゼ等が挙げられるが、頂点とされているのはマイスター・エックハルトである。思想史的には、アルベルトゥス・マグヌスの新プラトン主義傾向とトマス・アクィナスのスコラ学の影響が指摘されている。また後代へは、ルターの宗教改革、ペーメの神秘哲学を経由し、ドイツ観念論へ与えた影響が認められている。

神秘体験とは、基本的に、直接的な神との一体化、すなわちウニオ・ミスティカ（神人合一）を究極の在り方とするが、それを形容する表現（フレーズ）には様々なものが残されている。なかでもエックハルトの「(魂の根底における神の子の) 誕生」「(多から一への) 突破」というフレーズは度々引用されるものだ。神秘体験ないし神の姿を客体として信仰の対象とするのではなく、自らの中に直接的に生み出すこと、自らがそれ自身となることが志向されている。自らには及びもつかぬ高みの全知全能の神を崇め、その導きにより宗教的倫理に沿った生活を送ることに眼目があるのではなく、神の高みへと至ることができるのか、神と同じ業をなすことができるのか、暫定的に言葉にすれば、このような問いかけである。

ということは、そこでいわれる神とは、全知全能の審判者や救済者として実体化・対象化されるものではありえない。神とは、始原の業である世界創造の原理そのもの、生成と誕生と現象の力そのものである。言ってみれば、被造物の起源であり、彼方でもある。被造物の起源であるということは、あらゆる空間的・時間的・記号的区別と次元を異にする「第一原因」であるということ、そこから世界の区別が流出する「一者」、被造物の世界が姿形をとって現れる万物のはじまりとしての「一者」であるということだ。彼方であるとは、この「一者」から流れ出た具体的な形を持った被造物が、同時に、この「一者」へと流れ帰るということだ。構図から見ればまさに新プラトン主義といえる。

しかし、我々は「一者」から流れ出てはいても、いまだ「一者」には帰ってはいない被造物という存在の形式で、時間で、空間で世界を体験し、観察する。そこでは見るものとしての主体と、見られるものとしての客体が、そのつど、それぞれの役割を担いながら世界を構成し現

象させている。この観察の継続による世界の構成の在り方、観察を観察し、二次観察を積み重ねていくこの世界産出のメカニズムは、ルーマンの社会理論では、自己再生産するコミュニケーション・システムとしての「社会」、オートポイエーシスとしての「社会」として定式化されている。観察オペレーションをおこなうものが「システム」であり、システムは「システム／環境（自己／他者）」を区別する。この差異の観察（記述）が重ねられていくことが自己再生産の継続となる。継続（接続）能力の基礎となっているのは、ルーマンの説明によれば、「意味（Sinn）」（Luhmann 1998：47ff）であるがこのことについてはひとまず置いておく。

強調すべきは、この被造物の構造でできた世界では、ルーマンの文脈でいうシステムの観察による「社会」では、ドイツ神秘主義における神、「一者」「第一原因」「創造原理」としての神を、その本来の姿で現すことはできないということだ。「一者」であるとは、見るもの見られるものも含めたあらゆる区別が生じていない、あるいはそれが消え去った状態をいう。「第一原因」であるとは、すでにあるこの世界の存在者や言葉という形の「以前」を、それらすべての起源を暗示している。「創造原理」であるとは、いまだ何も現れていない状態、言い換えれば被造物の言葉では遡りきれない「（絶対）無」から、すべてが現象するようなあり方を伝えている。つまり、あらゆる差異の彼方である神の姿を、被造物のことばで、いわば此岸であるこちら側の区別と意味で捉えようとするのであるならば、このような否定的な形容でしか輪郭を伝えるしか方法はない。

エックハルトをはじめとする神秘主義者は、そのような、被造物のことばでは言い表ししようのない「神」、一者であり第一原因であり、創造原理である「神」を見出し、一体化しようとする。このウニオ・ミスティカは神を崇拝することによってでは達せられない。神の在り方と、神の業と自らが一体化すること、言い換えれば、自らのなかに神を「誕生」させることによる。とはいえ、この捉え方、表現も暫定的なものであり、そのプロセスを十全に説明することはできていない、ということはすぐに明らかになる。「神人合一、神の誕生、突破」ということばそれ自体が、発せられた瞬間に、すでに自ら顕せないものを、自らの力では説明できないものを抱えてしまうからである。

エックハルトは晩年、その特異な神の捉え方を説教を通して人々に広めたとして、異端審問にかけられた。判決は、彼の死後（！）に言い渡され、「単純な民衆の心がこれ以上汚染されることがないように」（上田 1998：267）（ヴェルテ 2000：90）、書物や冊子も含めことごとく断罪されている。すべてを見通す崇めるべき神、己を律する指針となる宗教、そのような関係を制度として保証する教会、このような立場とは、ドイツ神秘主義者エックハルトは相容れることはなかった。ある意味で真っ向から対立する方向へと彼は歩んでいたのである。

3. ことばと創造

聖書ヨハネ伝は冒頭で告げている。

初めに言（ことば）があった。言（ことば）は神と共にあった。言（ことば）は神であった。この言（ことば）は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらぬものはなかった。この言（ことば）に命があった。〈新約聖書『ヨハネによる福音書』第1章第1～5節/日本聖書協会1954年改訂版〉

それこそすでに無数の引用を生きてきたこのことばは次のことを伝えている。ことばは神であり創造主であった。このことばによって、神であることばによって、あらゆる被造物は現れ、命を与えられ、世界に場を占めた。このことばは、それ以前に、つまりあらかじめ世界に存在している何らかの事物、存在者に与えられた「名」なのではない。そうだとすれば、被造物が創造者である神に先行してしまうことになる。創造主のことばとは、それが発せられた瞬間に、同時に事物や関係が被造物として生じてくるようなことばをいう。

近現代の言語哲学の文脈でいえば、このようなことばとは、ひとまずカオスとして想定される始原（一者）の世界を根源的に分節化することによって、個々の事物や関係としての現象を可視化させ、存在化させることばのことを指すと考えられる。ソシュールが「ランゲージュ（深層言語）」の名を与え、非在を現前化させる（人間の持つ）能力、潜勢力としてのシンボル化能力としたものにこのことばは対応するのであろう。いずれにせよこのことばには、あらかじめの意味（指示対象）の負荷はない。ゆえに、このことばの力学では、主体と客体、あるいは観察するもの観察されるもの、意味を与えるもの意味を与えられるものが分離した関係は未だ生じてはいないはずだ。

我々被造物のことばはこのようにはいかない。一般に、われわれはことばの使用にあたって、それ自身もことばだとしても、指示対象としての意味を前提としている。ことばによってあらかじめの指示対象を想定し、意味として対象化する。発話者、言語使用者はことばと意味にとって主体であり、ことばと意味によって対象を呼び出し客体化する。このような被造物のことばは、再びソシュールの文脈に照らせば、現前の記号化、「ラング（表層原語）」に対応することになろうか。神のことばとは神そのものであり、誰かが主体として発する客体としてのことばではない。それは神と同じく、自らを原因とし、おのずから生じてくる創造の原理である。この神のことばと、誰かが主体となり何かが客体となる被造物のことばとでは、その力学に根本的な違いがあり、埋めることのできない宿命的な溝が存在する。

この二つのことばの隔たりを、エックハルトははっきりと意識していた。

あらゆる被造物は神の発話である。(Eckhart 1933ff : Bd.2, 535)

ヨハネ伝第1章第1節に「太初（はじめ）に言（ことば）あり、言（ことば）は神と偕（とも）にあり、言（ことば）は神なりき」とあるが、福音書の記者は「太初（はじめ）に存在するものあり、存在するものは神なりき」とは言っていない。(上田訳／上田 1998 : 330／Eckhart 1933ff : Bd.5, 37-48)

我々の知は神の知とことなる。すなわち、神の知が事物の原因であるのに対して、我々の知は事物によって引き起こされるものだからである。従って我々の知は、その原因である存在するものに依存し、そして同じ理由によって、存在するものそのものは、その原因である神の知に依存する。(上田訳／上田 1998 : 334／Eckhart 1933ff : Bd.5, 37-48)

神のことばは世界に先立つし、我々被造物のことばは世界に遅れる。神の業、創造の原理、起源としての一者、そして世界を生み出すことば、これらは被造物に与えられた言葉ではない。むしろこの被造物の言葉で神（の業）を「対象として」語ることはできるが、神と同じ業そのもの、世界の創造そのものをおこなうことはできない。すなわち神と等しくなることはないのである。とすれば、神秘主義者の求める神人同一とは、神のことばと一体化することは、我々の言葉によっては不可能である。それとも神へと至るためには、何らかの別の方策があると考えられるのか。エックハルトは説教のなかで、次のように語っている。

それでも神はなにものかである。だれがこのことばを語ることができるのか。それはこのことばであるもの以外のなにものでもない。神は自分自身を語ることばである。神のいるところはどこであれ、神はこのことばを語る。神のいないところではどこであれ神は語らない。(Eckhart 1933ff : Bd.2, 529)

被造物のことばの構造で見れば、発話の主体は神であり、発話の客体も神である。理屈で考えれば、この構造は自己言及する循環形態を成す。しかし、詳しくは次節で見えるが、この論理的な不整合は、あくまでも被造物の言葉から見たときの解釈である。むしろ我々がこの被造物の言葉としての限界を超えることができれば、このエックハルトの説教は、意味として（指示対象として）何を語っているかは理解できるにせよ、語られていることそのものは実現されることはありえない。それにもかかわらず、あくまでも頑なに、神のことばの道、神のことばとの一体化をエックハルトは求める。

このことを掘り下げる前に、被造物のことはもつ構造、こちら側のことはと世界との関係性、社会とコミュニケーションということばの世俗的な関係、彼岸ではなく此岸での関係を、ルーマンとフックスの視点から、すなわち社会システム理論の視点から、見直しておきたい。

4. 被造物のことはからの接近—リエントリー

世界創造の原理、万物の起源としての一者、神の業としての被造物を生み出す言葉、いまここで並べられたこれらのことは、むろん、その対象として何かを意味しようと試みている。その限りにおいて、神のことはそのものではない。指示対象として何かを意味しようとするとき、すなわちその言葉それ自身以外のものをある言葉が志向するとき、すでにそのオペレーションそのものが神のことはではないことを告げている。意味によって指示対象を表現することは、その時点で、神との一体化を放棄せざるを得ず、現れたその瞬間から被造物のことはであることを自ら証している。

関連して、フックスはスコラ学の教えを引いている。「神を見ようとするものは、神が見るように見なくてはならない」(Luhmann, N./Fuchs, P. 1989 : 85)。「神が見るように」とは、「神が世界を創造するように」と言い換えてもよい。見ることができるということは、神がそれを生んだ、それが誕生した、ということの意味するからだ。すなわち、神がことはそのものであることによって世界を生むように、われわれも世界を生むことはそのものでなければならない。しかし、神と一体化ができぬ限り、「神」ということはで神を対象化し、距離を取っている限り、それはそもそも不可能な話である。

それでは我々は被造物のことはで、我々のことはで神に等しくなることはできないのであろうか。神のことはそのものになることはできなくとも、「近づく」ことは可能なのであろうか。実際、意味と指示対象の被造物のことはを用いて、我々は神のことは、神の世界創造、神の業、そして神そのものの現れを、少なくとも、理解できるよう説明し表現している。それが、決して自らが志向するものそれ自身になることはなくとも、求められるのが何であるか、どのようなものであるかを、暫定的に、近似的に、こちら側の、被造物側の論理と方法と言葉で表わしている。

問題の核心にあるのは、このアプローチそのものが持つ、逆説的な構造だ。すなわち、近づくこうとするオペレーションそのものが、近づくこうとするものを遠ざけてしまうという逆説だ。神に近づくこうということは、神を対象化し、必然的に神との距離を呼び出してしまう。しかし神に近づくこうとする意志がなければ、神に近づくこと自体が生起せず、現象せず、可視的にならない。仮に、神との一体化がどこかで実現することがあるならば、それは被造物の言葉を通してではない、と被造物の言葉で表現はできる。近似的に、暫定的に「神と一体化」というこ

とはできるが、その発話そのものが「神との一体化」が成就していないことを明かしてしまう、というよく知られた逆説が生じる。エックハルト研究家のヴェルトは、彼の説教をパラフレーズしながら次のように言い換えている。

あなた方が、神の意志を充たそうという意志を持っている限りあなた方が正しく貧しくなるということもありえない。(ヴェルト 2000: 92)

(神性の最後の段階において経験されることは) 永遠なる神性の隠れたる闇であり、知られざるものであり、決して知られなかったものであり、これからも決して知られないであろうものである。神は、そこでは、神御自身において知られない。(同上)

正しく貧しくなるとは、エックハルトのことばによれば、空（無）である己が神と一体化することを表している。そこでは見る見られる、知る知られる関係は、生じない。神との一体化が起こるのは、被造物の意志や言葉では追いつくことのない空（無）の場であり、われわれの知らぬときに、そうとはわからずに起こっている、という表現だけが抜け殻のように残される。宗教における「究極の」段階を表す言葉は、多くの場合、このような逆説の構造を有している。「解脱」、「悟り」、「超俗」そして「神人合一」。これらすべてはそれを志向すること自体が、それ自身へ至ることを妨げる。自己否定的自己言及文の論理構造、真偽の判定を最終的に確定できないパラドクスを抱えている。解脱を阻む解脱しようとする意志^(注4)、悟りを取り逃す悟りの意識、あるいは俗を超え出ようと目論む世俗の野心等、繰り返される反転である。

宗教的言説に限らない。絶対という相対（的立場）の絶対性、必然という偶然（的立場）の必然性、自由という拘束（的立場）の自由、規範という逸脱（的立場）の規範性、……。これらすべては、論理的に一般化すれば、集合論（クラスとメンバー）のパラドクス、自らを要素として含める集合のパラドクスに、その定式化を認めることができる。またこのようなパラドクスは、自己言及を可能にするほど進化した指示体系システム（形式システム）においては避けようがない命題であることは、20 世紀の形式論理学において、ゲーデルの不完全性定理が明らかにしているところである。

むろん中世のドイツ神秘主義の時代には、近代論理学はなかった。とはいえエックハルトにとって、このような神への接近が、被造物の言葉が、神への接近それ自体を妨げるということは自明のことであった。後の 17 世紀以降の神秘主義の影響を強く受けた敬虔主義者たちも、あるいは修道院の僧侶たちも、神への接近と神そのものとの一体化の決定的な溝を、半ば意識しつつ、半ば無意識のうちに自らの根本的課題として捉えていた。あるいはそうとは知らずに乗り越えようとしていた。敬虔であること、戒律を守ること、教会で祈りをささげることそのものの意味と価値を認めると同時に、それ自体が自らの限界、いや最大の障壁でもありうる

いうこと、この問題と係わらざるをなかつた^(注5)。

禅仏教においても同様の状況があった。「悟り」への道は、師への従順な態度、身を清め俗の欲を抑え、ひたすら経を唱えることでは拓けない。しかし、それらを軽視することでは、さらに遠ざかる。このことを、修行僧たちはおそらく身に沁みてわかっていた。いや、修行において身体的な感覚として身に着けていった。(Suzuki 1990: 105ff) さらに時代を経れば、悪人正機説でもいい。自らを救うための善行は、救済を遠ざけてしまうのだ。

神秘主義が向かおうとした神人合一、禅仏教が至ろうとした悟りは、そもそもが起こりえぬ状態、前提を取り違えた命題である。少なくともこちら側の、被造物のことばの論理からはそのように考えるしかない。

振出しに戻ろう。神のことばを説明する言葉は神のことばではない。すでに意味と指示対象が一定程度共有されている(規定されている)言葉、被造物により繰り返され反復される言葉にすぎない。この被造物の言葉で世界を記述することとは、システム理論的に言えば、事前に想定された時空の論理に従った差異化、あらかじめのコードに基づいた差異化の積み重ねとなる。すなわち神のことばといえども、被造物の言葉のなかで被造物の言葉と差異化された「神のことば」でしかない。システム理論の術語を借りれば、システムの中に〈システム／環境〉を再び導入するリエントリー(再参入=内部転写)の構造だ。自己他者の関係でいえば、他者は自己の中で「他者」とされた姿でしかない。いわば自己のことばに翻訳された他者、システムのコードに転化された環境(=他者)であって、他者そのもの、環境そのもの、神そのものではない。ただし、このリエントリーによって、他者と環境はシステム化された形姿となり、被造物のことばによって扱うことが可能になる。被造物の言葉は、被造物の世界を安定的に記述することができる。翻って言えば、被造物のことばへの転換と閉じ込めは、「神」をも含めた世界の安定的な秩序を維持するための、最も合理的手段とも考えられる^(注6)。

それでは、この被造物の言葉によって、何らかの形で、創造のことばと、神の業と等しくなることは可能なのだろうか。このように問われれば、さしあたり「できない」と答えざるを得ないのだろう。少なくともこのままでは無理である。たとえ疑似的に、ということは意味と指示対象として、創造をなぞることはできたとしても、その言葉が創造を、神を「対象化」している限り、それ自身は「神のことば」ではありえない。

それでも神秘主義者は神を語ることをやめない。なぜだろうか。手掛かりになるかもしれないのは、フックスが書いている以下のような記述だ。

神秘主義のことばでは、このような問題に対応するものは、神の誕生、とされている。このことばで捉えられるべきことは、いかにして神が自らを、「自ら自身の中で捉え、見出し、神から神を生む」か、ということである。この無根底(底無しの無)は自分自身へと

向かうのだ。実体のないもの、始めのないもの、底のないものは、ただ自分自身のみを志向する。(Luhmann, N./Fuchs, P. 1989 : 81)

神のことは生むには、神そのものを生むには、われわれの言葉でいう「無根底」へ向かうことだ、と言われている。そしてそれは、「自分自身」を志向することだと捉え返されている。この説明は、「それでも神秘主義者は神を語ることをやめない」ことの説明となっているのだろうか。リエントリーという安定的な構造をなす被造物の言葉では、こちら側の言葉では、どのような説明が可能だろうか。その考察に入る前に、一度、「神学」の伝統でこの問題はどのように語られていたのかを確認しておく必要がある。

5. 「神」という属性―否定神学という逆説

神を形容することばの不在、神と世界を区別することの矛盾、被造物が神を語ること自体の不遜、すなわち神を概念として規定することの難しさは、古くから神学に対する、すなわち神を学として扱うことに対する障壁として立ちはだかつてきた。むろん、様々な形でのアプローチはあった。しかし、多くの場合、神を何らかの特性として表現することの不十分さ、どのような言語的限定からもこぼれ落ちてしまうアポリアを繰り返すことに終始している。その先に進むことは、宗教的時代的社会的に、危険と隣り合わせであったのだろう。

この難問に関して、ペーター・フックスは、5～6世紀、新プラトン主義の強い影響下にあったシリアのキリスト教神学者偽ディオニュシオス・ホ・アレオパギテスのことばとして「もはや差異化されない高み」という表現を引いている (Luhmann, N./Fuchs, P. 1989 : 99)。エックハルト研究家のベルンハルト・ヴェルテは、さらに遡り、4世紀のニュッサのグレゴリウスを引き合いに出している。「求められている者(神)は、すべての認識を超越しており、闇によってのように、神が概念把握されないという壁によって四方を閉ざされている。」(ヴェルテ 2000 : 96) とはいえ、ここまで進めば、神はどのような差異、認識、区別を超越しているのだ、という規定すらも危うく思えるようになってくる。

この伝統は、ヴェルテによれば、トマス・アクィナスを経由してエックハルトにも流れ込んでいる。神はいかなるカテゴリーにも属さない、神は何かであるという形容はできない、神は他のものと何らかの形で区別される存在者ではない。これらすべての「ない」は、むろん長い伝統を持つ「否定神学」の「ない」である。神は何らかのポジティブな実体として規定することはできない。

残されたポジティブな可能性は、神との一体化のみである。神のそのものでなければ、あるいは神のことばと一体化するのでなければ、肯定的な形での顕れは不可能なのである。とはい

え、これは神のことばを、神という超越の場、彼岸でのあり方を前提とした場合である。われわれは、否定神学の「ない」も含めて、我々の側から、すなわち被造物の世界から、被造物の言葉で神に近づこうとしている。我々の言葉が使用可能であるのは、有効であるのはその段階までである。「しかし」、とヴェルテは言う。

しかし、我々が神御自身に近付こうという思い切った試みを敢えてしようとする途端、我々は、まずは不可避なこの言語と、それに対応する表象様式を捨て去れなければならない。そのとき、我々は、最初、あるいは、最後のカテゴリーとしての実態のカテゴリーをも突き抜けた「無様態の」神へ行きつく。そのとき、我々は、(……中略……)あの否定神学へたどり着く。(ヴェルテ 2000: 99)

神「学」として、論理的な整合性を保って、概念としての宿命を背負って、我々は神を語る場合、それはやはり否定神学とならざるを得ない。が、それを捨て去ったときには、「最後のカテゴリーとしての実態のカテゴリーをも突き抜けた『無様態の』神」へ至るという。どのような形が想定されているのだろうか。

例えば11～12世紀の修道女でもあり巫女でもあるヒルデガルト・フォン・ビンゲン。彼女がおこなったとされる憑依状態での神の語り、忘我とエクスタシーのなかでの意識が消え去った叫びには「無様態の」神が宿っているのであろうか。おそらく、この問いは開かれたままとなる。答えようとした瞬間に、ことばの間のレベルと答えのレベルがねじれを起こし、呼びかけと応答はかみ合うことはない。仮に彼女が発することばが神の直接の声だとしても、それを受け取る我々はそれをそうだと理解する術を知らないのだ。

逆に、論理の徹底化はどうだろうか。否定すらも否定運動に巻き込むアドルノの否定美学は、肯定否定を問わずあらゆる限定を悉く退ける。少なくともそのような身振りをする。(アドルノ 2007: 197ff、他)あたかも被造物のことばの開き直りとも思われかねないこの「否定弁証法」は、否定の先の肯定へと、神を規定することの不可能性の徹底化による「無様態」へと踏み込んでいるのだろうか。神の創造のことばには存在しえなかった「否定語」、これこそが我々被造物の言葉の中核であり、我々に残された業は生み出されたものを次々と消去していくことである、とでも解釈可能なあの否定弁証法である。これも、おそらく、それが伝える起源と創造としての神のことばの否定を肯定へと反転させた瞬間、その肯定の兆し自体が否定へとひっくり返る。否定弁証法とは、いわば、表裏の反転が不断に循環する永久運動のことなのだ。

いずれも神から遠ざかることで神をかりうじて可視化する試みなのであろう。そして、この点でも、否定神学という「カテゴリー」に分類せざるを得ないのが、我々被造物の言葉の限界なのであろう。いずれにせよこの限界をわきまえたものは、神を語るとき、神のことばを真似

るとき、それ自身に何らかの否定の契機を身振りとして残存させざるを得ない。差異化の（ある指示を選び取る）永久運動からは逃れようがないのだ。あるいは、自らの能力の至らざることを神に示すと称し、僧院の修行僧のごとく、日々のおこないに励み、祈り、神からの奇跡を待つ。再び自らと神に線を引くこと、すなわち「黙する」ことになるだろう。憑依も、奇跡も、恩寵も、「我」を捨て、黙することで神に近付こうとする。このような形で、神秘体験が自らに訪れるのを神秘主義者は待つ。

沈黙とは、神との一体化がこの世では不可能であることが明らかになること回避するために、ことばとの接続を断ち切り、その状態を保留することの試みと考えられる。語れば語るだけ神から遠ざかる、という状況に追い込まれたとき、語らぬことを選ばざるを得ない。フックスが神秘主義者を形容するときに使う表現を借りれば、語らぬ先にあるのは、「場所内非場所性、時間内非時間性」の世界、単純に言えば「無」であり、かつ「そのまま」の世界である。この世界は「差異のない観察」によってのみ可視的になる。が、これはこちらの被造物の世界のことばではそもそもが形容矛盾である。社会システム理論の見地からは、未だ「何もマークされていない状態」^(注7)と表現される世界（以前）、観察以前の、まだ区別が、ということはまだ世界が始まっていない世界（以前）である。

しかし、このような「無」とは本当に「黙すること」なのであろうか。神の座、空としての場、離脱としての無、これらは何も言葉を語らないということと同義なのであろうか。あるいは何も語らないことが、最も接近することを意味するのであろうか。エックハルトの行状を振り返る限り、答えは否定的になる。彼は語らないことで神の無と等しくなる道を歩んではない。彼は進んで語ることを選んだ。同様に禅仏教も沈黙を選んではない。語るのだ。修行を通して、沈黙という形では「悟り」に達することはない。「公案」や「問答」を経ることで禅仏教は自らを遂行し、顕し、生きる営みが、自らの営みが不整合であることを可視化する。

エックハルトは喋り続ける。時には魚へも説教をおこなう。禅仏教の師も弟子も黙らない。時には全く意味不明のコミュニケーションを行う。その限界を十分に知っているにもかかわらず、彼らは語る。そして、この止まない語りが神のことばへのアプローチであるとされるならば、それはどのように考えたらよいのだろうか。その考察すらも、被造物の言葉と論理でなされるしか方策はないとしても、である。

6. 「神」の語り、「神秘主義者」の語り、「禅」の語り

エックハルトは自らが神と合一化し、言葉である神が（イエスが）自分の魂とともに（魂の中で）「神・ことば・魂」そのものを語り始める状況を、説教の中で次のように表現している。

イエスが魂の中で語るためには魂は一人にならなくてはならない。そしてイエスの語るときをきこうとするなら、魂自身沈黙しなければならない。まさにそのようにして、イエスは内に入り、語り始めるのである。主イエスは何を語るのか。自分自身を語るのである。それではイエスは何であるのか。御父の一つのことばである。(……中略……) イエスがこのような豊かさと甘美さをもって自分自身のうちへ流れ入り、自分自身から流れ出し、恩寵によって力強く自分自身とすべてのものを超えて流れつつ、自分の第一原因（最初の根源）に直接還流していくのである。(Eckhart 1933ff : Bd.1, 15-19)

神のことばを説くエックハルトのこの説教自体は神のことばそのものといえるのであろうか。また、そうであるならば、この説教の指示対象、意味、客体を想定することに何らかの意味があるのだろうか。神のことばが自らの魂とともに神自身を生み神を語りだすという、この言葉の自体の意味は失われ、指示対象を持たない言葉そのものとなるのだ、と考えたらよいのか。それともやはり、このエックハルトの説教も被造物のことばで語られたもの、指示対象と客体という意味を持つ、神を語ることによって神のことばから遠ざからざるをえない宿命を持った言葉と考えるべきなのか。エックハルトの説教は次のように続く。

この説教を理解できない人は、そのことで心を悩ませないで欲しい。何故ならば、人はこの説教と等しくなっていない限り、この説教を理解できないはずだから。なぜならば、これは神の心から直接現れてきた、被われていない真理なのであるから。(Eckhart 1933ff : Bd.2, 506)

この説教は、この説教と「等しく」なってはじめて、理解可能になるとされる。この説教は、すなわち、自らが神のことばであると自ら語っているのだ。仮にそのことを、「意味内容」として被造物の世界にいる我々が、そのまま受け取れば、この説教はこの説教を聞くものに何かを伝えたり、何かの役に立ったりすることを目論んでいるわけではない。この説教は、語ることそのもの、それ自身が神のことばであり神を生む業であることを伝える。少なくともそのように自認している。これはことば自らが生成し、創造する神のことばと同じなのだ、と。ただし、そのことを我々は意味と指示対象として知ることができるだけなのだが。実際、エックハルトは続けて次のようにも語っている。

もしここに誰もいなかったとしても、私はこの説教をこの賽銭箱に向かってでもしたに違いない。(Eckhart 1966 : 181)

このような言葉そのものの自己生成的動きの自認については、フランス象徴派の詩人たちを

待たずとも、ドイツ・ロマン派の詩人においても同様の証言がある。特にノヴァーリスである。彼にとってはこのことが文学創造の根源的真理にもなっていた。

……それゆえ言葉とはまったくもって不可思議な、実り豊かな秘密なのであり、もし誰かが、ただ語るためにだけ語るとき、その人はまさにもっともすばらしい、もっとも根源的な真理を語ることになる。しかし誰かが何かある特定のことにについて語ろうとすれば、気分を害した言葉はその人に全くばかげた、とんでもなく変なことを語らせることになる。
(Novalis 1987 : 426)

……しかし、私はこれをだれも理解できないことを知っている、……しかし、私がこれを語らずにいらなかったとするならば？そして、この語りたいという衝動が言葉の靈感、言葉の持つ働きの徴なのではないのか？また、私の意志がそうせずにはいらなかったことだけを望むのであるならば、この意志は、そう、結局は私の知や信にかかわらず、ポエジーでありえ、また言葉の秘密を明らかにしているということができないのではないか？
(Novalis 1987 : 426ff)

エックハルトの「神」を、ノヴァーリスは「ポエジー」に置き換えているが、言葉の自己生成能力そのものへの思いは記述としてほとんど一致している。いずれも主体として「誰か」が客体としての「何か」を語ろうとするのではなく、そのような差異と接続による指示対象、意味が消去された、あるいは現象することのない、自らの動きのみとしか言いようのないそれこそ「神のことば」であろうとする。先ほど引いた偽アレオパギテスの「もはや差異化されない高み」、「世界が世界を語る」言葉の動きである。むろん、それが実際起こっていたかどうかは、被造物の世界からは知る由はない。しかし、神のことばの再創造、神の自己言及、そして神自身の繰り返される誕生に等しい、とエックハルト、ノヴァーリスのことばは自認し、我々に「伝えて」いる。

エックハルトは後年、異端として宗教裁判にかけられている。神という対称の崇拝ではなく、神そのものを自らの中に言葉として生むウニオ・ミスティカへの志向は、むろん、教会の権威を失墜させる危険思想と見なされた。高慢とも不遜とも謗られ、貶められることになった。が、このような「高慢で不遜」と見られることが、「神学」との決定的な違いであるともフックスは述べている。(Luhmann, N./Fuchs, P. 1989 : 75) そして自らは「神のことば」の実践であると語るが、他方、その言葉を「被造物のことば」の側から、意味と指示対象として理解され、認められること、この非対称的なねじれ、逆説、パラドクスを抱えつつ、エックハルトら神秘主義者は説教をし、ノヴァーリスをはじめとする詩人たちは創作をした。書くことを、語ることをやめなかった。

神のことは自らを生成し、自らにのみ、つながっていく。それ自身のみ接続することで、一者であり続ける。一者から一者が誕生する、というトートロジー。こうとしか、こちら側からは、被造物のことでしか語りえない。

禅仏教においても同様の構造を見ることができる。エックハルトとおなじく、「悟り」へと至るためには、問答することを、語ることを、コミュニケーションすることを不可欠のプロセスとしている。むろん、これは被造物の言葉が、主体が客体を形容する言葉が、何かを言い当てることを目的としているわけではない。そのような言葉そのものが無効化される力を求められているのである。そのような言葉によって作られる世界、しがらみ、煩悩を断ち切り、解放されるためのコミュニケーションである。いや、そのような目的を持ったコミュニケーションと形容することすら躓きとなるのだ。このいま置かれている状況は無効化する、言葉によって言葉は無効化する、その無効化も無効化する、そのような志向性を禅仏教はもつ。とはいえ、そのような言葉を否定語によって拒否するだけでは決して消去されることはない。ただ忘却を抑圧する想起を引き延ばすだけの装置へと至ってしまうであろう（鈴木 1995：5-17）。

被造物言語の否定を直接表現するのではない離脱の形とは何か。垣間見えるのは自己否定自己言及パラドクスかもしれない。あるいは、おのずと生じた破壊と代謝の気づかぬうちの消滅と忘却、自然の摂理の時間的変容かもしれない。いずれにせよ、被造物の言葉、論理、区別と差異そのものの回避を、社会システム理論の観点からいえば、意味によるコミュニケーションの接続、自己増殖の無効化を、あるいはその彼方を見据える。それも、そのことを直接表現するのではなく、そうとは言わずに何らかの形で感知させることが問題なのだ。意味から逃れることはできない。接続は永遠に続き、その連鎖から逃れることはできない。

フックスとルーマンは、一つだけ可能性を暗示している。それは、それ自身へのみ、自らの言葉へのみ接続する言葉だ。その場合、言葉の意味や指示対象は、それ自身以外へと増殖することはない。そのもの自身でしかないならば、すなわち自ら以外のものを表すことのない言葉であるならば、それは一者であり、ことば自身であり、ひょっとすると神が神を生む営み、オペレーションなのかもしれない。エックハルトにも大きな関心を寄せていた、禅仏教の大家、鈴木大拙は以下のように述べている。

“空”といえ、すでに自己否定を意味している。しかし、沈黙したままでいるわけには行かぬ。問題の核心は、そこから逸脱することなしに、いかにしてその沈黙の真意を伝達するかである。禅ができるだけ言語表現に訴えることを避け、いわば、そこに何があるかを掘り出そうとして、われらをして言葉の奥底に参入せしめんと努めるのはこのためなのである。エックハルトは、この仕事を説教の中で絶えず行っている。彼は聖書の中から無心に発せられた言葉を幾つか拾い上げて、自分の意識せざる意識の内で、体験している“内なるはたらき”を顕わにさせるのである。彼の思想は、決して言葉の中にあるのでは

ない。彼は言葉というものを自らのさまざまな目的のための用具に変えてしまうのだ。同様に禅の老師は、自分自身、樹木、石、棒など、身近にあるあらゆる物を活用して憚らぬ。それから、彼は、叫び、打ちのめし足でけったりもするのである。……（鈴木大拙 2020：56）

禅問答が、自己否定の論理的パラドクスからそれ自身を創造することばへの変容を遂げようとする瞬間を、鈴木も、エックハルトも、ノヴァーリスも実践しようとする。むろん学者であるフックスはそれをこちらのことばで跡付けようとする。システム理論から見ればコミュニケーションにおける「非情報」という「情報」、「伝達しない」という「伝達」、「理解不可能性」という「理解」ということができるだろう。（Luhmann, N./Fuchs, P. 1989：87）あるいはそれ自身以外のなものにも接続することないことばへと変容すること、とひとことでいってしまうことも許されるだろうか。

7. システムと環境、リエントリー、非対称性

何はともあれ我々はこちらの側から、すなわち意味と指示対象を持った被造物の言葉でもって、「神のことば」を解釈しなければならない。最初の問題設定に戻れば、ドイツ神秘主義あるいは禅仏教の言語戦略、戦略といって語弊があるならば言語オペレーションとはどのようなものなのか、被造物の言語と論理を徹底化するルーマンの社会システム理論の視点から解釈してみることにあった。

ルーマンの社会システム理論の基礎は、差異化原理をもとにするコミュニケーションの継続的な接続、換言すれば情報・伝達・理解の選択をさらなる情報・伝達・理解の選択へとつないでいく自己言及、自己再生産、オートポイエーシス・オペレーションであった。このオペレーションをおこなうもの、より厳密に言えば、オペレーションそのものを「システム（自己）」と呼び、そのシステムと区別され、他者言及の対象となるものを「環境（他者）」と呼んだ。

差異化・コミュニケーション・言及のオペレーションが可能なのはシステムのみであり、環境はシステム言及に取り込まれる形で、つまりシステム内に想定された「システム／環境」差異として可視的となるのであった。言い換えれば、「システム／環境」差異は、システムと環境にとって中立的な位置にあるのではなく、システムのなかでのみ現れ、システムによってのみ言及・処理・接続可能なものとして扱われる。逆はあり得ない。環境が「システム／環境」差異を処理することは、その定義上、あるいは機能上ありえない。この点に注目すれば、システムと環境は決して対称的な関係ではない。環境はシステム側の論理で可視的にされ、言及可能なものとされる。それゆえ「システム／環境」差異はシステム内に再び現れるわけである

が、この非対称な構造をルーマンの理論では一般にリエントリー（再参入・内部転写）と呼ぶことになる。

「被造物の言葉」と「神のことは」も同じような構図で解釈することが可能だ。「神のことは」は、それ自身は差異化と情報・伝達・理解の三極選択を原理とするコミュニケーションを作動させるシステムではありえず（そうであるならば「創造する」言葉ではなくなってしまう）、そのようなものとして現れる場合は、常にシステム側から、すなわち「被造物のことは」の側から可視的にされ理解される。被造物の言語の他者であることを考えれば「環境」に相当する。宗教の文脈でいえば、彼岸は此岸からしか語られることはないし、超越は内在からしか可視的にできない、ということか。聖と俗の関係も同様と見做しうらだろう。

システム（被造物のことは）の内部に「システム／環境」差異（「被造物／それ以外＝神のことは」差異）を再び取り込み、可視的にし、取り扱い可能にする。しかしあくまでもシステム化された神のことはであり、神のことはそのものでは、おそらく、ない。「おそらく」とは、神のことはがそのものとしては不可視である以上、付け加えざるを得ない保留の表現である。

この関係における「神のことは」は、論理的には、ポジとネガの反転を繰り返す。神のことはは、被造物の言葉の中で、被造物の言葉とは区別される神のことはを伝える。しかし、これが被造物の言葉で伝えられた瞬間に、今度はそれが神のことはではありえないことを告げる。この反転の決定不可能性は無限に続く。さらに、被造物のことはは、このプロセスの中で、自らの起源としての神のことはの現れを常に先延ばしすることになる。システムの中で、被造物のことはの中で、現れる「神のことは」は、疑似的に可視化されることで一度は肯定されるが、その可視化自体がもたらす障壁によって、瞬時に否定へと反転させられる。この反復に対し、フックスはルーマンのシステム理論を展開する形で、「自らに抵抗するものを一挙に非決定性へ持ち込む言語形式」とし、ドイツ神秘主義の核心とも捉えている。（Luhmann, N. / Fuchs, P. 1989 : 94）おそらくルーマンが後年よく用いる術語でいえば、この両極への連続する揺れをリエントリーが引き起こす「振動」と重ねることもできる。そしてこの「振動」のみが被造物の言葉に残存する神のことはのかすかな兆しであり続ける。

このような言語の揺れは、私見によれば、ドイツ神秘主義のみならず、その後の、特にドイツ文学の歴史に棲息する拭い去ることのできない徴として残り続けた。先ほど挙げたノヴァーリス、あるいはシュレーゲルのいうロマン的イロニーは典型的な顕れである。さらには近現代においても、トーマス・マンにおける自己言及のシステム、アドルノの否定美学（否定弁証法）、さらにはカフカの比喩と現実の非対称的な決定不可能性でもいい。この文学の伝統には、神の創造することはへの「不遜な」志向性がある分だけ、かすかに残る創造の際につけられた傷の痕跡として、繰り返し忘れられない痛みを呼び起こしている。痛みはわずかな言葉の「ずれ」（＝喩え）を伴うことで「メタファー」としても現れる^(注8)。

「語ること」と「黙すること」は、「被造物の言葉」と「神のことは」の関係として、非対称

的な相互入れ子構造を取っている、ととりあえずまとめておこう。「語ること」は、自らと差異化することで「黙すること」を語りだす。ところが、その語られた「黙すること」は、その語り自体が意味する無効性を語りだす。すなわちこの関係は、可視化されている限り、あくまでも「語ること」のうちにリエントリーされた形で、しかし消え去らぬ創造の傷として、非対称的な痕跡としてかろうじて顕れている、ということになるだろうか。

1. それに加え、秘匿、時間と永遠、二元化の彼方等の理論的概念、さらにはここでは特異な感を与える企業コンサルティングにおけるコミュニケーション障害なども扱われる。
2. おそらく 1979 年に刊行されたホフスタッターの『ゲーデル・エッシャー・バッハ』が、少なくともその問題圏の広がりを定式化したことに大きな役割を担っているだろう。ルーマンも事あるごとにこの書の重要性に触れている。
3. ベーター・フックスはこの傾向を強く持っている。実際、彼はのちに論理的なシステムを出し抜く形で現れる言語現象、メタファー、失語症等に関する研究を数多く発表している。とはいえルーマンによって書かれた「序」では、徹底的におこなわれた議論の末、二人の見解は完全に一致していると述べられており、この方向性もルーマンの考えから遠く離れたものではないと考えられる。
4. これはショーペンハウエルに見られる「意志を捨てようとする意志」のパラドクスを思い起こさせる。
5. エッケベルト (1979) 第 8 章第 1 節を参照されたい。
6. とはいえ、どのような言葉にも、その最初の誕生の徴が、神の創造のかすかな痕跡が残っている、と感じていた詩人は少なくない。神の最初の発話の衝撃は、われわれにとっては違和感として、あるいは消え去らない傷として飢えている。こうした作品の系譜は確実に存在する。
7. よく知られているようにルーマンはこの論理と術語をスペンサー・ブラウンの『形式の法則』から導入している。
8. 「メタファー」として展開する試みとして次の論文を参考されたい。(鈴木 2019)

<参考文献>

- アドルノ、Th. W. 木田元他訳 (1996) 『否定弁証法』作品社
- アドルノ、Th. W. 大久保健治訳 (2007) 『美の理論 (新装完全版)』河出書房新社
- 上田閑照 (1998) 『エックハルト』講談社学術文庫
- 上田閑照／柳田聖山 (1982) 『十牛図』筑摩書房
- ヴェルテ、B. 大津留直訳 (2000) 『マイスター・エックハルト』法政大学出版局
- ヴェンツラフ＝エッケベルト、F. 横山滋訳 (1979) 『ドイツ神秘主義』国文社
- エックハルト、M. 相原信作訳 (1985) 『神の慰めの書』講談社学術文庫
- エックハルト、M. 田島照久訳 (1990) 『エックハルト説教集』岩波文庫
- 鈴木大拙 (2020) 『神秘主義』岩波文庫
- 鈴木純一 (1990) 「トーマス・マンにおける自己言及のシステム」『詩・言語』34、pp.37-92
- 鈴木純一 (1995) 「形式システムと禅における二元論解体のパラドクス」『北海道大学言語文化部紀要』28、pp.5-17
- 鈴木純一 (2019) 「社会理論における観察概念から見たメタファーの機能」『メディア・コミュニケーション研究』72、pp.75-93
- ホフスタッター、D.R. 野崎昭広他訳 (1985) 『ゲーデル、エッシャー、バッハ』白揚社

- Eckhart, M. (1936ff.) *Die deutschen und lateinischen Werke*, herausgegeben im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart.
- Eckhart, M. (1966) *Deutschen Mystiker des 14. Jahrhunderts*, herausgegeben von Franz Pfeiffer, Leipzig (1857), Neudruck Aalen (1966).
- Haas, A. M. (1984) *Das Ereignis des Wortes sprachliche Verfahren bei Meister Eckhart und Zen-Buddhismus*, Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistes-geschichte 58(4): 527-569.
- Kafka, F. (1983) *Erzählungen*, in: Gesammelte Werke; herausgegeben von Max Brod, Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag).
- Luhmann, N. (1998) *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main. (邦訳は、ルーマン、N. 馬場靖雄他訳 (2009) 『社会の社会 I・II』 法政大学出版局)
- Luhmann, N./Fuchs, P. (1989) *Reden und Schweigen*, Frankfurt am Main (stw.848).
- Novalis (1987) *Monolog*, in : Novalis Werke; herausgegeben von Gerhard Schulz, München (C.H. Beck).
- Suzuki, D. (1990) *Leben aus Zen*, O. W. Barth Verlag

《Zusammenfassung (summary)》

„Reden“ in der deutschen Mystik

—Eckhart und Zen-Buddhismus aus der Perspektive der Sozialtheorie—

Junichi SUZUKI

Der Zweck dieser Arbeit besteht darin, die einzigartige sprachliche Kommunikation in der deutschen Mystik und im Zen-Buddhismus aus der Perspektive von Luhmanns Systemtheorie zu untersuchen. Die deutsche Mystik war eine religiöse Philosophie, die sich im 13. und 14. Jahrhundert im Rheintal verbreitete und deren Vertreter Eckhart war. Sie strebten eine direkte Verbindung zwischen Gott und Mensch (unio mystica) an. Als Methode spielten dabei Schweigen einerseits und Reden andererseits eine voneinander abhängige Rolle. Durch seine Predigten versuchte Eckhart, gottgenerierende oder sich selbst erzeugende Worte wiederherzustellen. Dies bedeutet eine Wiederholung der „Schöpfung“ Gottes durch Worte. Andererseits verwendet der Zen-Buddhismus auch die Sprache (das Reden) als zentrale Methode. Asketische Mönche meditieren schweigend beim Zazen und streben nach „Erleuchtung“. Sie kommunizieren aber auch verbal anhand der „Ko-ans“, die ihnen ihre Lehrer geben. In diesem Fall ging es um die Verleugnung und Überwindung der verbalen Kommunikation. Die Soziologen Niklas Luhmann und Peter Fuchs bieten in ihrer Studie „Reden und Schweigen“ eine eigene Interpretation dieser beiden religiösen Bestrebungen aus systemtheoretischer Sicht. Luhmann und Fuchs zeigen, dass sowohl die deutsche Mystik als auch der Zen-Buddhismus der Struktur selbstverleugnender, selbstreferenzieller Paradoxien folgen, die versuchen, das Wort Gottes in der Sprache der Systeme zu erläutern. Andererseits handelt es sich hierbei um eine re-entry-struktur (Wiedereintrittsstruktur) in der Systemtheorie und kann als negative Theologie in der Systemtheorie betrachtet werden. Die re-entry-struktur drückt die asymmetrische Beziehung zwischen dem System (dem Wort der Schöpfung) und der Umwelt (dem Wort Gottes) sowie das Verhältnis gegenseitiger Abhängigkeit aus. Auch die Beziehung „Reden und Schweigen“ hat eine ähnliche Struktur. Dies deutet nicht nur auf die Grenzen der deutschen Mystik und des Zen-Buddhismus hin, sondern lässt sich auch als das Potenzial beider interpretieren, sich zu erneuern, zu verändern und zu regenerieren. Zumindest kann man es als ein solches Zeichen erkennen.

